

---

# 剣士で魔術師でたまに軍師な狐

ロア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

剣士で魔術師でたまに軍師な狐

### 【Zコード】

Z8900Z

### 【作者名】

ロア

### 【あらすじ】

大好きな人がいた、今は許せない人がいる 幼馴染の命を奪つた相手ともみ合いになり、真冬の夜に橋から転落した北村純。しかし次の瞬間には、人間ではなく狐の獣人の体に宿されて異世界に召喚されていた。魔法や魔物が存在する産業革命後の激動の近代ヨーロッパに似た異世界で、時代と世界の波に翻弄されながらも純は生きる。

## プロローグ

大好きな人がいた、今は許せない人がいる　彼はその許せない、  
許したくない相手に声をかけた。

「……赤松吉宏」

赤松吉宏と呼ばれた男は、背後からいきなりフルネームで呼び捨てにされ、怪訝そうに振り返る。

振り返った先には、まったく見覚えの無い若い男が立っていた。眼鏡をかけた、日本のどこにでも溢れている凡庸そうな青年。

「誰だよ、お前……何の用だ？」

赤松は露骨に不審そうな表情を浮かべたまま、青年を上から下へと眺めた。改めて見ても、紺色のスーツを着た普通の青年だ。就職活動中の大学生か、社会人新米にしか見えない。

青年は髪を派手な金色に染め、耳にはピアスをつけて、一般人が想像するであろう典型的な不良、もしくはそれに類する容貌の赤松に睨まれても、顔色ひとつ変えなかつた。普通ならば、怯えるなりなんなり、何らかの反応を示してもいいはずなのに。

相手の様子を完全に無視して、青年は静かに口を開き、彼の幼馴染の名前を口にした。

赤松の反応はわかりやすかつた。驚き、そして硬直している。

「そうだよ、忘れてるはずがないよね。君が殺した人の名前だから

青年は表情をまったく変えないまま、そう言つた。赤松の背筋に

震えが走ったのは、冬の海風に吹きつけられただけではなく、その言葉に含まれた冷たさのせいだ。

「だ、誰だお前……どうしてそんなこと知ってるんだよ、畜生」「別にそんなことほんびんでもいいよ、ただ君と話がしたかったんだ」

赤松は田の前にいる青年が狂っているのではないかと思い、何か助けは無いかと周囲を見渡した。

真冬の夜の、河口に架かる大きな橋の上。歩道には電灯が明るく灯っているが、周囲に人影はまったくない。一車線の道路上は、時折車が通り過ぎていくが、歩道にいる一人には田もくれない。

相変わらず無表情の青年は、赤松の助けを求めるような視線の揺れがとまるのを待ち、それから続けた。

「君が殺した彼女は、僕の幼馴染だよ。それで本当に反省しているかどうか、話を聞きたくてね」

赤松は何も答えられなかつた。ただ自分がはずみで殺してしまつた相手の、幼馴染だと名乗る相手の言つことを聞く。

「少年法つていいなあ、彼女はまだ何十年と生きたかもしれないのに、君は五年ちょっとで塙の中からこいつして出て來てるわけだし」

そんな言葉がすらすらと青年の口から出て来る。赤松の頭にその言葉が入つていくと同時に、猛烈な怒りがわき上がりつて来た。

「つるせえ、てめーにそんなことを言われる筋合いはねえよー」

陳腐な台詞とともに、相手の襟元を掴んだ。青年はされるがままだ。

「俺はな、もう罪を償つたんだよー。もつ誰からも非難されるいわれはねえ！わかつたかこの馬鹿野郎！」

飛び散る唾と怒声を顔に浴びながら、青年は良心の呵責も何もあつたものではないその叫びに、一言だけ応じた。

「……よかつた」

直後、赤松は脇腹に走った痛みに仰け反った。まるで火傷をした瞬間のような、猛烈な痛み。

赤松が視線を下げて痛みの根源を見ると、そこには青年の右手と、黒いものが見えた。

「て、てめつ……！」

黒いものがナイフの柄で、刃は深く自分の脇腹に食い込んでいることを理解した瞬間、赤松は無我夢中で青年を押していた。必死で青年を押し離して、ナイフを抜こうとする。

電灯の灯りの下で、二人はもみ合う。押された青年の腰が橋の欄干にぶつかり、そして呆気なくそれを越えた。青年は、両手で赤松を掴んで放さなかつた。

そこからは、ただ単純に重力に従うだけだった。橋の欄干を乗り越えた一人の体は、冷たい真冬の水面へと落ちていった。

遠のいていく橋の上の灯りを見ながら、彼はこれで本当によかつ

たのだろうかと自問自答していた 答えを出す前に、彼の意識は闇に沈んだ。

北村純きたむらじゅんが意識を取り戻して最初に考えたのは、自分は生きているのか、そしてここはどこなのかとこうことだった。

純の目には、ここがどこかの地下室のよう見える。煉瓦の天井と床、そして壁。薄暗くてよくわからぬが、湿つて陰気な空気はそこが地下室だと教えてくれているような気がした。

あの赤松にナイフを刺してもみ合いになり、真冬の河口へと転落したことまでの記憶はある。しかし、そこからこの田の前の状況へとまったく繋がらないので、とにかく純は混乱した。

「……！？」

今更ながら純は、自分が身動きひとつ出来ないことに気がついた。指一本動かせない。それどころか、声すら出すことができなかつた。視点の高さや向きから、自分が立つた姿勢でことだけはわかつたが、それがどうしたという話だ。

正真正銘の金縛りに自分が遭っていることに気づいた途端、パニックの波に巻き込まれた。必死で動こうとすることばかりに意識が向き、まともな思考などあつという間に吹き飛んだ。

純が無駄な努力を重ねている間に、変化が起きた。壁際のランプのよがよがの火の灯りの陰で、何かが動いたからだつた。純の視線がそこに釘づけになる。

「遂にやつた……私は召喚に成功した」

しわがれた声が、純の耳に届いた。闇の一部が動いたと思つたら、そこから黒いロープを着込んだ相手が姿を現したのだ。

もし純に声を出すことが出来れば、きっと絶叫していたに違いない。純は金縛りという状況下で、相手のことを幽霊か何かとしか考えることができなかつた。

「これは狐……？」

ようやく見えた相手の顔を見て、純は息をのんだ。浅黒い肌を持った女だ。しわが多く見えるから、年寄りだろうか。

召喚とか狐とか、意味のわからないことを呟いている相手が自分の近寄つて来るのを見て、純は逃げ出そうと必死で手足を動かそうとするが、どうにもならない。

謎のロープを着た女が、純の眼前にまでやつて来て、立ち止まる。

「でもこれからじつくじと調べていけば……まずは契約を」

やはり意味不明なことを呟いている相手がロープの内懷へと手をやり、そこから出て来たときには、その手には短剣が握られていた。ランプの薄明かりの下で、刃が鈍く光つた。

殺される 純の中で、その思いだけが膨らんだ。得体の知れない女が刃物を手に迫つてきている、純としては殺されるにしか思えない。

こうなる前には、自分が相手にナイフを突き刺していたことなど、純の頭からは見事に欠落していた。

「や……めり、近寄るなあー！」

純の口から声が迸り、次の瞬間には女が吹き飛んだ。見えない何かに腹を殴られたかのように、体を折り曲げて、本当に後ろへと勢いよく吹っ飛んだのだ。

「そんな、術をかけたのに……！？」

煉瓦の壁に叩きつけられた女は咳き込んだ後、信じられないと言わんばかりの様子でもらした。手近なランプがいつの間にか消え、さらに暗くなっている。

純にも何が起こったのかさっぱりわからない、声は出せたが相変わらず体は動かせないままだ。

「こうなつたら多少傷つけて、大人しくさせてからでも

自身に言い聞かせるように咳きながら、ふらりと女が立ち上がる。殺意というものが立ち昇っているように感じられて、純は恐怖のあまり頭がどうにかなってしまいそうだった。

落とした短剣を拾い上げ、再び女がこちらへと迫った瞬間　何かを壊すような激しい物音がその場に響き渡り、女が背後の闇へと振り返る。

「どうしてここに……あがつ！？」

女の言葉が、そこで途切れた。純の耳が次にとらえたのは、何か大量の水が床に落ちたような、重く湿った音。純は嫌な予感しかしない。

女がまた振り返って、自分へと両腕を突き出して、ふらつきながら近寄つて來た。まるで映画のゾンビのような動きだつた。

純は自分が悪趣味なホラー映画の被害者役にされていると思い、これが夢か何かであつて欲しいと切実に願つた。目を閉じればいいと思つたが、それすら出来なかつた。

そして純は見た。女のローブの肩から脇腹にかけてがばつさりと裂かれ、その下の皮膚も同様で、どす黒い血が足元へと流れ出しているという現実を。

あまりの光景にもはや声すら出なくなつてゐる純の目の前で、女の口が動き、それから一気に全身が燃え上がつた。

人が燃えている、それを認識した瞬間、純は本当に狂いそうになつた。

燃えながら恨めしそうに両腕を突き出したまま、女が自分に近づいて来る。純は自分が何かを声の限り叫んだ気がしたが、目の前が真つ暗になつてそれ以上は何もわからなくなつた。

## プロローグ（後書き）

「」この場で小説を公開するのは初めてなので、いろいろと至らな  
いところだけですが、これからよろしくお願いします。

「」意見や「」感想をお待ちしています。

意識を取り戻してから目を開けるまでが、とにかく怖かった。またあんなリアルで残酷な光景を見せつけられたら、今度こそ発狂してしまうと、本気で信じたからだった。

まずは手足が動くかどうかを確かめた。上に布か何かがかぶせられている感覚はあったが、普通に動いた。そして首も動かすことができた。どうやら横になつてているようだ。

自分が金縛りに遭つてないことを確認してから、純は恐る恐る目を開けた。最初に見えたのは、木の板で構成された天井だった。地下室のあの陰気な臭いもこもつていいない。

やはりびくびくとした動作で毛布をかけられていた上半身を起こし、周りを見た。それでやつと、純はある程度落ち着くことができた。

純が寝ていたのはベッドの上で、地下室などではない普通の部屋の中に自分がいることを知つたからだった。

純がいるのは、お洒落でレトロな感じのする部屋だった。窓から射し込んでいる陽光が、とても暖かい。

天井と同じく床は木製だったが、壁は明るい白の煉瓦でつくられている。あまり大きくない部屋で、家具といえば純が寝ていたベッドの隣に小さな机と椅子、それから壁際に棚が一つ並んでいるだけだ。

もちろん一体どうしてこんな部屋にいるのだうという疑念はあつたが、なにしろついついさつきまでかどうかは知らないが、とにかく意識を取り戻す前には死ぬような恐ろしい目に遭つたのだ。

それを考えれば、目の前の部屋のことなど、どうとこういふことはな

い。

とはいえた、やはりここがどこなのか気になりはじめたところで、部屋の入口のドアが開いた。緊張が高まり、純はドアへと警戒する視線を向けた。

「よかつた、気がついたんですね」

入つて来たのは、優しそうな若い男の人だった。優しそうといふのは、全身を見ての感想だ。

背は高くも低くもなく、すらりとした体をゆつたりとした紺色の着物で包んでいた。前に朝のドラマで見た、昭和時代の落ち着いた大人そのものだった。

あの狂つた女はローブに浅黒い肌というとんでも具合だったが、多少古い感じがしても目の前の男性は、日本人にしか見えない。それに何より、穏やかな表情を浮かべた相手と話せるのは、今の自分にとって願つても無いことだと思えたのだった。

「あ、はい……あの、何かお世話になつてているようで、ありがとうございます」

「いえいえ、気にしなくても大丈夫ですよ。そちらこそ大変な目に遭つたようですね」

ベッドの上でぺこりと頭を下げた純に対し、男の人は手を振り微笑しながら答える。

そのまま歩いて来ると、ベッドの隣の机の横に置かれていた椅子に腰を下ろした。

「そなんです、まるで意味がわからなくて……」  
「あなたは？」

とりあえず相手はなんとなく年長者の方に感じたので、丁寧な応対をするよつこ心がけて尋ねた。

「まあ、まずはお互いの自己紹介からにしましょつ。私の名前は、  
**菊池貞則**といいます」

「菊池さん、ですか……自分は北村純です」

純が名乗ると、菊池は驚いたようだつた。すぐに純に尋ねて来る。

「北村さんは、私と同じ皇國の出身ですか？」

「皇國」と言われてすぐには何の「ことかわからなかつた。こりこりへ、広告、公国、皇國と頭の中でよつやく理解と思われる変換に辿り着いたといふので、心じる。

「ええと、天皇が治める国とこひ意味の皇國ですよね？」

「そりですよ」

「あ、なら日本のことですよね、それならそりです」

随分と古風な言い方をするんだなあ……と純は思ったものだ。怪訝な顔をした菊池が何かを言つ前に、さらに純は質問した。

「出身を聞くつて、こりこり日本じゃないんですか、外国だなんて言いませんよね？」

「こりこりは帝国ですが……」

帝国と言われて、純こりこりの國の「ことかわづわからなかつた。やつやめでは落ち着いていた心が、また不安に揺れ始めた。

「そうだ、あの、自分でうしてここにいるんでしょうか。自分、いきなり頭がおかしくなっているとしか思えない女人に」

「少し待つて下さー、順を追つて話しましょー」

「は、はー」

勢いに任せて質問を浴びせまくらうとした純を、菊池は片手を上げて制した。

それで純も少しは落ち着き、とにかく事情を知つていそうな菊池の話を待つ。

「北村さんはあのダークエルフの女とどうこう関係だったのか、よろしければ教えて欲しいのですが」

「はあ、ダークエルフって何かの冗談でしょーか……よくわかりませんが、気がついたらいきなり目の前にいて、自分のことをナイフで刺そうとして来たんですよ、狂つてますよ。しかもいきなり燃えてしまつたし、なんですかあれ？」

あの時の光景を思い出し、純はまた肝が冷えた。菊池のダークエルフとかいうファンタジックで珍妙な表現も、すぐに頭から消えた。

ふと純は思いついた。実はこれは全部、夢か何かなのではないかと。

あの赤松ともみ合つて河口に落ちた自分は意識を失い、誰かに助けられたものの病院のベッドの上にいて、今も夢の世界か……さもなくば、あの世なのかも。

「いっー!？」

純は実に原始的な方法でとりあえず田をこすつてみたが、その途端に目に激痛が走つて涙が出てきた。

慌てて涙を拭おうとするなりに痛くなり、結局泣くに任せることなかつた。

田に何かちくちくしたものが刺さつてゐる感じがしたが、涙を流していくうちに一緒に落ちたようで、ちょっとしてから田を開けることができた。

「大丈夫ですか、でもその手でいきなり田を強くこすりするからですよ」

机の引き出しから出した薄い布で自分の田元を拭き、涙を拭つてくれた菊池がそんなことを言つた。

自分の手は汚れていたのだろう、そう思つて右手に視線を落とした自分は、絶句した 茶色の細かい毛に覆われた自分の手を見れば、人は誰しもやうなると思つ。

「え、あれ？」

反射的に左手で自分の右手に生えているとしか思えない毛を撫でたが、その左手にも同じ茶色の毛が生えていた。袖をまくつてみたが、まくつたところまでの腕一面も同様だつた。

そこで自分が菊池と同じ着物を着ていることに気がついたが、それどころではなかつた。

着物から覗く自分の胸元を見れば、そこにもやはり皮膚は見えず、純白の毛並みだけが見える。

「どうしたんですか、北村さん……？」

「どうしたも何も、ほら、自分の体に動物みたいな毛が生えちゃつてるんですよ、明らかにおかしいじゃないですか！？」

躍起になつて体のあちこちを探つて生えている毛並み、もはや動

物のそれとしか思えないものに触れながら、菊池に訴える。

「そう言われても、あなたは狐の獣人ではありませんか？」

引き出しから新たに出した手鏡を見せながら、菊池が不思議そうに言った。

そこには全身を覆う毛並みと、お尻にあつたふわふわの尻尾に気づいて、ぽかんと口を開けた狐の顔がうつっていた。純はそれが自分の姿であると気づいた瞬間、気絶しそしなかったものの、また声の許す限り絶叫していた。

純は恥も外聞も無く、泣きながら菊池に訴えた。自分は人間だつたこと、冬の夜に橋から落ちたこと、あの狂つた女とのこと、そして今ここに入外としていること。

改めて話してみても、まったく理解不能な事態だった。

泣きながら話している最中、頭にある三角形の耳に触れてみたが、しつかりと触れた感覚があり、やはり鏡の中の狐が自分であることを認めざるを得なかつた。

自分が人間ではなく、狐との合の子のような状態になつてしまつたというのは、純をパニックの口の中に突き落とし、泣き喚かせるだけの衝撃力があつた。

「そちらの事情はわかりました、しばらくここで待っていてください」

一通り話しあると、菊池はそう言って部屋から出て行つてしまふ。部屋の外から話しが聞こえるので、何やら誰かと相談してい

るよつだ。

残された純はといえば、落ち着かずはずつと狐の体をいじつては、本物だと実感して気を失いそうになるのを繰り返していた。手鏡を見ても、明らかに恐慌状態とわかる狐の顔がうつるだけで、純は諦めて菊池が戻るのをただ待つだけにした。

「お待たせしました」

菊池がやつと戻つて来た頃には、なんとか純も泣きやんでいた。

「あなたの話を魔法の専門家と検討してみましたが……落ち着いて聞いて下さいね」

「わ、わかりました」

田尻に残つた涙をそつと拭つてから、菊池が一体何を言つのか待つた。

「あなたは召喚されたんですね、あなたのいた世界からこの世界へと

純は呆然とした。そしてありえないと脳内で反射的に否定したが、すぐに考え直した。

今の今まで、召喚などというファンタジーなことにまったく考えが及んでいなかつたが、確かに召喚という非現実要素がありえるならば、今のこの状況をすべて説明できるような気がしたのだ。

「一体誰が、何の目的で自分を……まさか」

「そうです、あなたが見た頭のおかしい女は、過去の禁じられた魔法に手を出して大きな被害を出し、指名手配されていたダークエル

フです

召喚の次は、ダークエルフと来て、純はいよいよファンタジーが現実であることを認めなくてはならなくなってきた。

「ダークエルフって、あの耳が尖つていて魔法が上手なエルフの、悪い奴……？」

「大体それで合っていますね。この辺りでは魔女として知られたなかなか有名なダークエルフだつたのですが、昨夜ついに居場所を突き止めまして」

どうにも嫌な予感がしたが、黙つて菊池の話の続きを聞いた。

「居場所の地下で見つけたので、ぱっさりと斬つてしまつたわけですが」

「え……いきなり、ですか？」

「大変危険な存在で手間取つたら何をするかわからないので、見つけ次第殺すようにと言われてましたから」

あつさりと菊池は答えた。

いきなり殺すというのもまた衝撃的だが、この穏やかな学者風の菊池が殺しをするような人だとは思えなかつたので、そちらの方にも純はかなり衝撃を受けたが。

「それで一撃で深手は負わせたのですが、なんと自殺されてしまいまして」

「あの、一気に全身燃えてしまつた？」

「ですね、あつという間でした。それから地下室の奥を調べたところ、気を失つているあなたを見つけたというわけです」

とりあえず今の菊池の話でのひざにホラー映画じみた展開の経緯はわかつた。

しかし、純が知りたいことはまだまだある。

「自分が召喚されたということについて、もっと詳しく述べ話を聞きたいんですけど……」

「残った魔法陣や資料から、あの魔女がどうやらまたしても禁じられていた大昔の召喚魔法に手を出していたことがわかりました。そのこととあなたの話を関連付ければ、あなたが異世界から召喚された、という結論に辿り着くわけです」

純はもう納得するしかなかつた。

人はあまりにも驚くべきことが連續すると、それに慣れて諦観の境地に達するらしいが、今の純がまさにその状態だった。

自分はあの狂ったダークエルフの女のせいでの異世界に召喚されたところのが現実のようだ。

「でもどうして人間じゃなくて、こんな狐の体に……元に戻す方法とか、無いんですか？」

「すみません、召喚魔法の重要な部分が記された本は魔女が持つていたようなのですが、一緒に燃えてしまつたようで、詳細はまったくわからないんです」

最悪だ、と純は思った。

「もちろん調べは進めますが、なにしろ古代魔法の一種で謎が多過ぎるので、今のところはあなたが人間の体に戻る、あるいは元の世界に帰還する方法はない、と言わざるをえません」

どうやら最悪の前に、最低といつも語も付け加える必要がありそうだった。

## 異世界召喚（後書き）

「」意見や「」感想をお待ちしております。

馬鹿な話といえばそうかもしれないが、純が幼稚園からずっと付き合いのあつた幼馴染を初恋の相手だったと認識したのは、彼女が死んでからだった。

忘れられないあの日は、高校三年生の冬だった。希望する県内の大学に首尾よく合格し、入学まで何もすることがないという解放感を味わいながら、家でだらだらする毎日。

部屋でのんきに購入して来た軍事関連の書籍を読み漁っていたとき、部屋のドアがノックされた。

返事をして入室を促すと、両親が入つて来た。一人とも明らかに様子がおかしかった。緊張しきりで、自分にそのまま座つていろと言つた。

まさか大学のことで、何があつたのかな？

最初に考えたのは、それだつた。合格は間違いだつたとか、そういうこと。だとしたらとんでもないことで、両親が深刻な顔をするのもわかる。

「純、落ち着いて聞いて欲しい」

父がそう言つて話した内容は、幼馴染が死んだというものだつた。純は信じられなかつた。昨日、本屋で会つたばかりの彼女が、死んだと言つられて、すぐに信じられるものか。

もちろん純が信じようが信じまいが、事実は変わらない。彼女は買い物帰りに何者かに殺されたのだつた。

嘘だ、そんなのありえない。

最初に両親に對して言つたのは、それだつた。それしか言えなかつた。

テレビでも新聞でも、女子高生が白昼堂々、商店街という衆人環視の中で殺害されたことを大々的に報じていた。

不良が多いことでも有名な地元の工業高校の三年生が犯人だつたという事實も、話題性を上げて報道の過熱を促進させた。

純がどこか夢を見ているような氣分のまま、あつという間に全ては進んで行つた。蒼白な顔をしたまま、幼馴染の葬儀に出た。

葬儀の場でようやく現実感が襲いかかり、真つ青な顔で泣き出す自分を見て、彼女の両親が声をかけてくれた。娘と一番仲良くしてくれていたのは自分だと言つて、一緒に泣いてくれた。

葬儀が終わり冬から春になる頃まで、ずっと純は死んだように生きていた。毎日何をするでもなく、ずっと部屋で考え込んでいた。

両親はカウンセラーを受けることを薦めたが、純は断り、考えつづけた。

その結果として、自分は死んでしまつた彼女を本当に好きで好きでたまらなかつたことに気がついた。

純は愕然として、それからとてつもない喪失感に毎日悩まされた。小さい頃から一緒にいたから、恋愛対象というよりは家族のように思つていた。だから、中学でも高校でも、恋人同士という関係での付き合いはしなかつた。

しかし純にとつては紛れもない初恋の相手だつたのだ。もちろん、死んでしまつた幼馴染もそうだつたかどうかまでは、わかるはずも

ないが。

純は相変わらず死んだような有様だったが、とにかく大学に入学した。そして、とにかく勉強しまくった。

両親は自分が勉強に励んでいることを立ち直つたと考え、素直に喜んでいたが、そういうわけではなかつた。勉強に集中していないと、彼女のことを考えて気が狂いそうになるからだつた。

そんな日々を送つてゐる間に、幼馴染を殺した犯人に対する判決が出た。懲役五年と少しだつた。

犯人は幼馴染に無理に言いより、断られ続けた結果として、逆上してナイフで刺し殺したというが、深く反省しいまだ少年であることから更生の余地があることを考慮した結果の判決だそうだ。

ふざけるな！

テレビでその報道を見た瞬間、自室で純は叫んだ。

彼女はまだ何十年と生きたかもしれないのに、犯人の身勝手な理由で殺されたのに、その犯人はたつたの五年ちょっとで罪を償い、生きていくことができるという。

純は、犯人を許せなかつた。悲しみから怒りへと感情は切り替わつた。

憎悪に任せて、純は犯人のことを調べ上げた。なにしろ地元で起きたことだ、友人知人を総動員して、犯人を特定した。

事件直後に工業高校の三年生でいなくなつた人間を探せば、すぐにつかつた。それが、赤松吉宏だつた。

幼馴染の家族にも確認した。本当はいけないことだつたが、どうしても我慢できなかつた。

犯人が赤松吉宏で間違いないことを確認した後は、どうしようかまた悩んだ。

殺してやりたい、と考えるまでは簡単だったが、それはやはり人として一線を越えることだし、自分の人生を捨ててまでやるべきことなのかどうか、考えに考えた。

そういうしている間に大学四年生になつたが、成績は学科の中で一番だつたので、あまり苦労せずに大学の助けを得て、内定を獲得了。

就職してからもやはり仕事に励み続けたが、相変わらず悩み続けていた。

それから赤松が派出所したことを知り、様子を見に行つた。赤松の家族は引っ越していたが、それも聞き込みで知つていたので、新たな自宅を確認した。

赤松は家族に甘えて、派出所後もだらしない生活を送つていた。毎日遊び呆けていたのだ。親が金持ちであることを、純は本気で憎んだ。

ここで赤松が本当に更生していれば、純はきっと復讐などという不毛な考えを捨て去つたに違いない。

しかし、赤松は更生していなかつた。だから、どうしても純は許せなかつた。決意をかためた。

そして赤松が歓楽街で遊び歩いた帰り、あの冬の夜に、声をかけたのだ。もちろん懐にはナイフを忍ばせて。

ここでも、もしも赤松が事件のことを反省し、何か純に謝罪するようなことでもあれば、純は赤松にナイフを刺したりしなかつた。

だけどあの糞野郎は、何の更生もしていなかつた。だから、

刺した。

確かな手ごたえを感じたところで、赤松が自分に掴みかかり、そのままもみ合つて橋から落ちて

純は田を覚ました。また前の世界での陰鬱な回想をする夢を見たことに辟易としながらも、ベッドから起き上がる。すぐ横の手が届く机の上の刀掛けにある短い刀、脇差を紺色の着物の腰に差して、それから部屋を出た。

「おはよひびきます、師匠」

「おはよひびきます、純」

部屋から出ると、純は菊池とそう朝の挨拶を交わした。早速、菊池と一緒に朝食を準備する。

「今日はいい天氣ですから、まずはシーツを干しましょう」

「はい、師匠」

朝食を食べながらそんなやりとりを交わす。

食べ終わると、純は早速ベッドのシーツを回収して、外に出た。途端に爽やかな空氣が全身を包み込み、暖かい風が茶色い毛並みを優しく撫でた。

前を見ればかなり先の森まで続く縁でいっぱいの草原が、後ろを見れば天に連なつているような高い山脈の峰々が並んでいる。空はどこまでも青く澄み渡り、ところどころに千切れ雲が浮かんでいる。

大自然の春を満喫しながら、純は狐のふんわりとした尻尾を上機嫌といった様子で揺らしつつ、家のあるちよつとした丘を下り、その横を流れている川へと向かった。

先端に雪を抱く高山からの雪解け水が流れる豊かな川で、早速シーツを洗う。水がとても冷たかつたが、気持ちよかつた。

シーツの洗濯を終えると、絞ったそれを持ってまた家に戻った。煉瓦造りの菊池の一軒家だが、すでに半年以上住んでいるので、我が家という気持ちがする。

家の横の風通しのよい場所に設けられた、木製の物干し台にシーツを干す。風にシーツがゆらゆらと揺れる。

最初は自分の抜け毛のせいで汚れるのではないかと心配したが、本物の狐ほど抜け毛はひどくなく、獣人というだけあって人間として生活をするうえであまり不便はなく、それは純にとつて救いのひとつとなつた。

「師匠、シーツを干し終えました」

「ご苦労様です」

家の中に戻つて報告すると、そう返事が返つて來た。

「今日は魔物狩りに行きますか、グーゴを狙いましょう」

「本當ですか、師匠。やりがいがあります」

菊池から脇差よりも長い、主力となる刀を受け取つて腰に差しながら、純は嬉しそうに答えた。

剣術を教わるようになつてから半年が過ぎているが、それまではひたすら菊池に痛めつけられながら稽古を受けていただけだったので、魔物が相手の実戦と言わるとやはり俄然やる気が出る。

「では行きましょう

「はい、師匠！」

元気よく答えて、外に出た。先程シーツを洗つた川沿いに、草原の先にある魔物の住処である森へと向かつて歩く。

こうして菊池と歩いていると、これが当たり前のよつたな気がする。しかし今でも時折、自分が異世界にて、しかも人間ではなく狐の獣人という、二次元でしかありえなかつた状況に陥つているのもまた、信じられなくなるが。

この世界に召喚されてしまった以上、ここで生きていくほかなく、純は剣術の達人らしい菊池から生きるためにいろいろと教えを受けているのだ。

その関係で菊池を師匠と呼ぶよつとされたのだが、最初はすでに一〇を超えている身でそう呼ぶのが恥ずかしかつた。そのことを素直に菊池に言つたところ、生徒が教師を先生と呼ぶのと違ひはありませんよ、常識ですと言われて至極納得したものだ。

とにかく菊池にはこの世界のことをたくさん教えて貰つてはいるので、まさに恩人だ。社会のことはもちろん、言葉は通じるが文字はわからなかつたので、それも座学で習つてはいる。

春の景色を楽しみながら歩いてはいるつむじ、森の入口へとやつて来た。

ここでは魔物、いわゆるモンスターが出る。なんともファンタジーなことだが、魔法も存在するのだから、今更純は驚く気にもれない。

純も菊池も特に身構えることなく、森に入つていいく。

森に入つてすぐ、ぎやあぎやあといつ奇怪な叫び声とともに、しわくちやになり吹き出物だらけの緑色の皮膚に覆われた醜悪な小人が、棍棒を振り回しながら襲いかかつて来た。

RPGなどではお馴染みのいわゆる「ゴブリン」といつやつだった。

純は左腰に差した鞘から刀を抜くなり、襲いかかつて来た先頭のゴブリンの頭を、躊躇なく刎ね飛ばす。切断面から盛大に鮮血をまき散らしながら、頭を永遠に失つたゴブリンの体が数歩進んだ後、雑草の上に転がつた。

一体目も上半身と下半身を斬り分け、三体目も首に刃を刺し込んで殺す。ゴブリン五体の遺骸がたちまち量産されたが、純も菊池も氣にも留めない。

「ゴブリンは棍棒を使つたりするくせに、いまだに純や菊池が自分達よりも強い敵であるということを学ぼうとしない。

最初はこんな雑魚でも、恐ろしく苦労したよなあ。

そう思い、はじめてゴブリンに遭遇したときの自分の慌てぶりが懐かしくなつた。

なにしろゲームでは序盤の雑魚に過ぎなかつたが、リアルとなると話は別だ。自分を殴り殺そうと棍棒を手に凶悪なゴブリンが駆け寄つて来たときには、本当に心臓がとまるかと思った。

もちろん冷静に対処すれば、やはりゲームと同じく雑魚でしかないと学んだ後は、このようにどつといつともなくなつたが。

襲いかかる魔物を斬り捨てながら、昼でも薄暗い森の中の探索を進める。子供の頃なら、幽霊が出るとかそういう妄想をしただろうが、幽霊どころか魔物が出るので冗談ではない。

菊池は基本、手出しをしない。助言は口にするが、純が危なくな

つたときか、自分に襲いかかつて来た魔物に対処するとき以外には、刀を抜こうとしない。

そうやつて進んでいると、遂にお目当ての魔物 グーゴを見つけた。

グーゴは、大型犬の体に山猫の頭をくつつけたような外見の魔物だ。とにかく何でも喰らう貪欲な魔物で、今も仕留めたらしい牛に似た大きな魔物を食り食つていた。

純に気がつくと、唸り声を上げて起き上がり、警戒姿勢に移る。そのまま前方を行つたり来たりを繰り返し、純の様子をうかがつている。

純は片膝をついて踵の上にしゃがみ込み、姿勢を低く保つ。左手は刃の収まつた鞘を握り、じつと痺れを切らしたグーゴが襲いかかつて来る瞬間を待つ。

しばらくすると遂に我慢しきれなくなつたグーゴが飛び上がりて襲いかかつて来た。このまま押し倒して牙で引き裂くか、前脚を振るつて純の首の骨をへし折る気だ。

大型の凶暴な肉食魔物が、咆哮しながら飛びかかつて来る様は、常人ならば正気を失つて逃げ出させる迫力を持っていたが、純を搖るがせることはできなかつた。

間合いに入つたことを確信した純は、抜刀しながらこちらも飛び上がり、次の瞬間に刃をグーゴの首に一閃させた。

空中で純とグーゴがすれ違つたが、着地と同時にどちらが勝者か判明した。

純は着地すると刀を素早くグーゴに向け直したが、グーゴは頭から地面に落下し、そのまま動かなかつた。

地面に伏せたまま動かなくなつたグーゴの首は半分近く斬られ、そこからじくじくと血が流れ出ている。

「見事です、血抜きの手間も省けますね」

「ありがとうございます、師匠」

菊池の褒め言葉に内心では結構喜びながら、純は刀を鞘に収めた。

## おわる（後書き）

新年あけましておめでとうございます、今年最初の投稿になつました。

そして新年早々ですが、友人からタイトルがひとつきにへることお叱りを頂いてしまつたので、改題としました。

まだまだ始まつたばかりですが、これからも本作をどうぞよろしくお願いします。

「」意見や「」感想をお待ちしております。

## 町に行く

グーグーを倒して引き揚げた翌日、純と菊池は町に行くことにした。理由は、仕留めたグーグーを売るためだ。

身支度を整えると、家を出て昨日の森とは逆方向、つまり高い山々が連なっている方へと草原の中の道に沿って向かう。

道といつても、人ひとり分の幅だけ腰の上まである草が踏み分けられ、地面が見えやすくなっているようなものだ。

アスファルトで舗装された道を歩くことに慣れた現代人であつた純としては、最初は道は道でも獸道ではないかと思つた。

新緑の香りを胸いっぱいに吸いながら、草原の中の一本道を延々と歩いていく。子供の頃、空き地の背の丈以上の草をかき分け、冒険気分で進んだことが思い起された。

どこか懐かしく清々しい気分で歩き続いていると、やがて草原が途切れた。

その先は目的地である町　　ヴィーゼシュタットだ。単純にヴィーゼと呼ぶことが多い。

町の周囲の草が刈り取られているのは、敵を丸見えにし忍び寄られないようにするためだ。

さらに町は広場を中心として、円形に建物が配置されているが、その背の部分を町の外側に向けて、隙間なく繋げている。つまり家の壁を城壁のようにしているのだ。

家の屋上には常に見張りが立てられ、接近してくる相手がいればすぐに報告が行くようになつていて、

常に襲撃に備えているなんて、平和な日本では考えられない光景だよね。

城壁をつくるほどの規模ではないヴィーザのような町であつても、外敵からの防衛が第一に考えられているというのは、平和な日本で生きていた純にとつては何度見ても感心するしかない光景だ。こういった努力のおかげで、草原を行動範囲とする夜行性の魔物から町は守られ、安全な場所となつていて。

「やあ、どうもキクチさん。今日は何を持って来てくれたんですか？」

建物の壁の繋がりが途切れている部分には門が設けられ、そこにいた門番が笑顔で尋ねて来た。

菊池はもちろんだが、純もすでに一年近くここにいるわけで、何度もこの町には来ているから、すでに門番に菊池の弟子として覚えられていた。

門番といつても中世の鎧姿ではなく、普通の洋服を着て、腰にサベルを吊っている人だ。

刀剣類だけでなく銃もあるし、最初に純が想像したような中世ヨーロッパではないことは、大分前からわかつている。

門番が普通の人間と違うところは、頭には犬の耳、お尻にもやはり犬の尻尾があるところ。つまりこちらの方は、この世界では割とポピュラーな半獣人である。

「昨日、純がグーロを仕留めましてね、それを売りに来ましたよ」「それはすごい、ジ Yun君も腕を上げましたねえ。さすがは我々の祖先といったところですか」

普通、獣人とはこの門番のよつたな獣耳に獣尻尾が付いた、いわゆる半獣人を指す。

純のよつたな動物の頭に全身に体毛が生えている本当の意味での獣人というのは、今では希少で絶滅危惧種のよつたな扱いを受けているらしい。

最初の獣人というのは純と同じタイプばかりだつたらしいが、人間との長い付き合いの歴史の中で、次第に今のような半獣人ばかりになつていつたとのこと。

そのため半獣人の方々からすれば、純はご先祖様のような位置になるらしいが、別に崇められるわけでもなんでもない。

本当の獣人は基となつた動物の特性を濃く受け継いで身体能力も高いとのことだが、純としてはより人間に近い半獣人の方がよかつた。

そういうえば、菊池からは普通の人間を相手に本氣で喧嘩をするようなことは絶対に避けるようにと言われた。

なんでも自分が本気で普通の人間を殴る蹴るしたら、手足の骨は折れ関節は破壊され、胴体なら内臓破裂、頭ともなれば頭蓋骨陥没は必至らしい。手足はともかく、他はほとんど致命傷だ。

半獣人も常人よりは身体能力が高いが、純のよつたな本物の獣人となるとその倍以上の力を持つていると説明された。

それじゃ正真正銘の化け物みたいじゃないですか……でも師匠はそんな自分と普通にやりとりしていますよね？

腕つ節が強いのはこんな物騒な世界で生きるうえでは心強いとはいえ、自分がまさしく人外になつてしまつたことを嘆きつつ、疑問に思ったことを菊池に尋ねてみた。

なにしろ菊池はそんな化け物級の力を持つ自分を余裕で打ち負かして、普通に剣術の稽古をつけている。菊池の話が本当なら、対等にやりあえるはずがないのだが。

「ああ、私は鬼の血が入つてますからね、力だけならあなた以上です。そんな返事がさらりと返つて来たときは、純は言葉を失つたものだ。

鬼と言われて真っ先に純が思い浮かべたのは、昔話で桃太郎に退治されたりする金棒を持った赤や青や黄色のカラフルな巨人だ。

まあ、そういうのもいるにはいますが、と菊池にその話は笑われてしまつたが、鬼にもいろいろあるらしい。菊池がそういう野蛮な方でなくてよかつた、と純は思った。

菊池はここからずつと東のこの世界での日本にあたる島国、皇国の出身らしいが、その鬼の力を持て余して旅に出て、前の世界ではヨーロッパに相当する位置の一国、ここ帝国に辿り着いたらしい。

だから鬼の血が入り剣術の達人で人外の力を持つ菊池相手ならば遠慮する必要は無いが、殺し合い以外で一般人を相手にするときは、手加減をするようにと厳命され、その訓練も菊池から受ける羽目になつた。

「どうしました、純。開きましたよ」

「あ、すいません、今行きます！」

考え事をしている間に、門番が町の門を開けてくれていたので、急いで純は菊池の後を追つた。

ちなみに門はこことは反対側にもうひとつある。万が一ここが使えなくなつた場合に、出入りが困難になるからだ。

門をくぐり、左右の建物を抜けば、そこはもう広場だ。広場にはいくつか出店や屋台が並び、あれこれ販売している。

ここは人口が三桁に届くか届かないかの町というよりは小さな集落に近いが、それでも昼間の今はあちこちで住人が活動している。

特徴的なのは、住人のほとんどが半獣人ということだ。ここは帝國の中でも最西端の方で、一部の国々から迫害を受けた半獣人が逃げのび、集まつて始めた町らしい。

帝国ではそういう差別は現在では無く、この辺りでしか採れない高価な薬となる高山植物や希少な高山動物の毛皮、それから山羊や羊を飼つたりして生活をしている。

「いらっしゃいませ！」

「ここにちは、イリスさん」

出店のひとつで店番をしている白い猫耳、猫尻尾の女の子に純は挨拶をした。

イリスはこの町で薬草などを扱っている商店の看板娘だ。瞳が大きく笑顔が眩しい可愛い女の子で、商店の売り上げ向上にかなり貢献している。

「ジュンさん、今日はお買い物の？」

「いや、グーゴを昨日やつつけたから、それを売りに来たんだ」

純がイリスと話している間、菊池は懐から文庫本のようなものを取り出していた。そのページをめくり、一番新しいところで手を止めた。

「グーゴ」

菊池が一言やつ言つと、足元が一瞬光に包まれ、それが消えるとそこには昨日仕留めたグーゴが横たわっていた。

「師匠、それ本当に便利ですね」

「まったくです、古代魔法というのは偉大なものですよ」

菊池が持つている本は魔本という、何やらそのまんまな名前のような気もする書物の一種だ。この魔本は失われた古代魔法の遺産のひとつで、非常に貴重なものだ。

なにしろ家の一軒や二軒分の家財が余裕で収まる、特殊な収納系魔本である。しかも中に仕舞つた物品は劣化したりしないとは、驚異的だ。

使い方は簡単、仕舞いたい物を選んでその名前を唱えて、魔本を手に仕舞えと願うだけ。するとそれは魔本が持つ別の空間へと転送され、本の中に仕舞つた物の名前が追加される。

出すときは出したい物の名前が記されたページを開き、それを出したいことを願つて、名前を唱えるだけ。恐ろしく便利。

こんな物をぽんぽん生み出して使つていた古代文明は相当なものだが、大昔に滅んでしまったので、今ではこの魔本も世界に数えるほどしか残つていないと、

そんな貴重な魔本をどうして菊池が持つているのだらうかと思つたが、深く詮索しないことにした。大事なのは、今ここにあって、それが使えるということだ。

「僕をここに引きずり込んだのも古代の召喚魔法だつていうから、まったく。

純が呆れとも感心ともつかない感慨を覚えている間に、イリスと菊池との商談は進んでいるようだつた。

「大物ですね、ここは思い切つた値段で買い取らせてもらいますー。」「それはよかつたです」

グーゴは太い毛は衣類や帽子などに使え、ひずめなどが目や耳に効く薬をつくることができ、商品価値が高い魔物だ。ただし見た目通り非常に凶暴なので、下手をしたら即座に胃袋行きにされてしまうが。

「それでは、お金はいちらうに」

どうやら無事に商談は成立し、イリスはグーゴを、菊池はお金を受け取つてゐる。

「あ、よかつたら自分が運ぶの手伝いま  
「俺が運ぶの手伝うよ、イリス！」

イリスが大きなグーゴを運ぶのに苦労しているのを見て、純が手伝いを申し出ようとしたが、割り込んで来た別の大声に邪魔され、最後まで言うことはできなかつた。

純は少しむつとしたが、声の主を確認すると納得した。

「ありがとう、ライン」  
「いいよいよ、こんな楽勝だー。」

グーゴを余裕といった様子で運んでいるのは、ラインといつたの犬の半獣人の青年だ。いかにも元気いっぱい、野を毎日駆けまわつているような快活さをいつも周囲に振りまいている。

ラインはイリスの商店の隣の道具屋、その息子であり、イリスとは小さい頃からの幼馴染。そういう関係に水を差すのは愚か者のやることなので、純はわざと引き下がり、別の屋台の商品を眺めたりしている。

「師匠、もう帰るんですか？」

「まだ帰りませんよ、今日は大事な用がシーファさんにありますからね」

シーファはこの町に住む唯一のエルフだ。何やら高名な魔法の専門家らしいが、どうしてこんな田舎というか、辺境の町にいるのが、いまいちよくわからない。

広場を抜けて大きな焦げ茶色の煉瓦造りの家へと向かう。ドアをノックして、菊池が中に声をかけた。

「菊池です。入りますよ、シーファさん」

菊池とシーファは仲がいいらしく、勝手知ったるなんとやらといった様子で、菊池は家の中に入していく。

純もお邪魔しますと言つてから、菊池に続いて家の中に入った。

「うう……」

家中に入った途端、アルゴールの強烈な臭気に襲われた。狐の敏感な鼻が悲鳴を上げ、思わず純は仰け反る。

シーファさん、こんな真昼間から飲み過ぎだ。やっぱり絶対

アル中だよ！

シーファはとんでもない酒豪で毎日酒ばかり飲んでいるのは知っているが、家の中がここまでひどいとは思わなかつた。

そういえば、前に会つたときも口からアルコールの臭いがしていた。

「書庫でしようか、いふとしたら」

そう言つて菊池は、本棚から溢れた大量の本と紙で悲惨なことになつてゐる書庫に入つた。

案の定、シーファは奥にある机の上で酒瓶を抱えて居眠りしている。

「シーファさん、起きてください。菊池です」

「うー……なんだ、キクチか」

菊池が揺すると、ようやくシーファは重たそうに瞼を開け、エメラルド色の瞳を見せた。

エルフといわれると、なんとなく創作の影響で若々しい美男美女のイメージがあるが、シーファはただの中年男なので、純は自分の抱いていた勝手な想像を見事に粉碎されたものだ。

ただ瞳は本当に白く、尖つた耳を持っているので、この辺りはイメージ通りだつた。もつとも今は酒に酔つてゐるせいか、白い肌も内から赤くなつていたが。

「何の用だ、キクチ。せつかく俺が酒を飲んで気持ちよく寝ていた」というのに

「今日来ると言つていたではありませんか。まさか忘れたのではな

いでしょう？』

『さあて、なんだつたかなあ……』

菊池の話にもいい加減な受け答えをし、赤ら顔の顎に生えた無精ひげを手でこすりながら考え込んでいるシーファは、どこかひびつ見ても飲んだくれの駄目な中年オヤジだ。

だ、大丈夫かな、このおつせん……？

高名なエルフの魔術師をしておつせん呼ばわりはまずい氣もしたが、こんなだらしない有様を見せられると、ついそんなことを思つてしまつ。

そもそもシーファとか、なんとなく綺麗な名前なのに、全然似合つていないと、そんなことも考へてしまつ。

『おお、やうだつた。そここの狐小僧に俺が魔法を教えるんだつたな

！』

『はつ？』

このだらしなさのせいでの魔術師として成功していないんじやないかな、とか相変わらず失礼なことを考へていた純だつたが、いきなりのその言葉に間の抜けた声を出し、狐の口をぽかんと上下に開いたまま硬直してしまつた。

町に行く（後書き）

「」意見や「」感想をお待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8900z/>

---

剣士で魔術師でたまに軍師な狐

2012年1月5日22時48分発行